HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	恋愛行動と恋愛心理の多様性に関する比較社会生態学的検討 ： 社会環境要因と個人要因の交互作用効果 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 順子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13247号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71502
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Junko_Yamada_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　山田　順子

学位論文題名
恋愛行動と恋愛心理の多様性に関する比較社会生態学的検討：
社会環境要因と個人要因の交互作用効果

・本論文の観点と方法

本論文の目的は、ヒトの恋愛行動や恋愛心理に対して、社会環境要因および個人要因が与える影響を明らかにすることである。ヒトをはじめ有性生殖を行う動物が自らの遺伝子を次世代へと継承していく上で、恋愛関係――すなわち異性との性的関係を獲得し維持していくことは重要な適応課題である。一方で、恋愛関係をはじめとした対人関係におけるヒトの行動や心理は必ずしも普遍的ではなく、社会によって異なることも見出されている。本論文は、社会生態学的アプローチに則り、こうした恋愛行動や恋愛心理の多様性を、ヒトが集合的に作り上げた社会環境における適応の結果として解釈する。その上で、社会環境要因として恋愛関係の取捨選択の自由度と定義される恋愛関係流動性、個人要因として恋愛関係市場における個人の魅力度と定義される配偶価値に注目し、それぞれの要因が人の恋愛行動や恋愛心理に与える影響を検討した。

・本論文の内容

本論文は、３部で構成される。第１部では、本論文の背景と理論を述べた。まず第 1 章では、本論文が依拠する 2 つの研究分野である進化心理学と文化心理学の知見や理論、そして問題点を述べた。これまで進化心理学を中心に、適応の観点から人間の様々な恋愛行動や恋愛心理が明らかにされてきた。それらの行動には、魅力的な異性を惹きつけるためのシグナリングや、獲得した魅力的な異性をライバルから守るためのパートナー保持、またそうした行動を支える心理である親密性や情熱がある。しかし、従来の進化心理学におけるヒトの恋愛関係研究は、ヒト普遍的な行動や心理を見出す一方で社会環境の多様性を十分に検討してこなかった。これに対し文化心理学は、ヒトが長い歴史の中で集合的に作り上げた文化（社会）の多様性に関するモデルを構築し、恋愛関係をはじめ対人関係における人間の行動や心理の多様性と、そうした多様性に関する説明モデルを提唱してきた。しかし文化心理学研究もまた、導出される個々の説明モデルを包括しうるメタ理論の不足という問題を抱えてきた。

第 2 章では、こうした先行研究の知見を統合し両分野の問題を解決する新たな理論的枠組みである社会生態学的アプローチについて述べた。このアプローチは、進化的適応の観点から、ヒトが集合的に作り上げた社会環境それ自体を新たな適応環境として解釈する。これにより、ヒトの社会行動や社会心理の多様性に関する知見や理論を一つの問いに集約することが可能になる。これを踏まえ第 3 章では、ヒトの恋愛行動や恋愛心理に影響を与える社会環境要因として、社会関係の取捨選択の自由度である関係流動性（Yuki & Schug, 2012）を取り上げ、恋愛関係が流動的な社会環境ほど魅力的な異性をめぐる競争が激しく、それゆえに異性への積極的なシグナリングやパートナー保持が必要となり、そうした行動を支えるパートナーへの親密性や情熱といった対人心理も高まるとする本論文の第一の検討課題を述べた。加えて本論文ではさらなる理論の拡張を目指し、社会環境に存在する個人の配偶価値の分散を新たに加え、恋愛関係流動性が高く競争的な社会環境ほど、個人の競争力である配偶価値の効果が強いという本論文の二つ目の検討課題を述べた。

以上の議論を踏まえ、第 2 部では上述した 2 つの検討課題に対して本論文が取り組んだ 3 つの実証研究について述べた。本論文は、恋愛関係流動性が低いことが知られている日本と、恋愛関係流動性が高いことが知られているアメリカおよびカナダの間で比較研究を行なった。まず第 4 章から第 5 章では、

第一の検討課題に取り組んだ。第 4 章では、社会環境の恋愛関係流動性が、ヒトの恋愛関係におけるシグナリング行動である自己価値誇示（自らの優れた遺伝子型や生殖能力のアピールおよびコミットメント・シグナリング（パートナーに対する排他性の証明）に与える影響を検討した。研究の結果、自己価値誇示（研究 1-1）およびコミットメント・シグナリング（研究 1-2）は、いずれも日本よりも北米でより行われることが示された。自己価値誇示の社会差については恋愛関係流動性の有意な媒介効果が得られず、自己価値誇示の社会差が両社会の恋愛関係流動性の差異に起因するとする本論文の予測は支持されなかった。しかし、コミットメント・シグナリングの社会差に関しては恋愛関係流動性の有意な媒介効果が得られた。そして、恋愛関係流動性が高いほどコミットメント・シグナリング行動が有効となり、それゆえに積極的なコミットメント・シグナリング行動が行われるとする本論文の予測を支持する結果が得られた。

続く第 5 章では、社会環境の恋愛関係流動性が、恋愛行動を支える心理としての親密性や情熱的な愛に与える影響を検討した。研究の結果、日本よりも北米の方が、恋愛パートナーに対する親密性（研究 2-1）や情熱（研究 2-2）がいずれも高いことが示され、本論文の予測が支持された。しかし、親密性の社会差に対しては関係流動性の有意な媒介効果が得られず、社会関係一般の流動性の差異は恋愛パートナーに対する親密性の社会差を説明しないとの結果が得られた。一方で、情熱の社会差に関しては恋愛関係流動性の有意な媒介効果が得られ、恋愛関係流動性が高いほどパートナーへの情熱が高いとする本論文の予想を支持する結果が得られた。加えて、パートナーへの情熱とコミットメント・シグナリング行動の間にも有意な関連が得られた。この結果は、恋愛関係流動性の高さが、パートナーに対する情熱を高めることを通じて積極的なコミットメント・シグナリング行動を導くとする本論文の仮説を支持する結果である。

最後に第 6 章では、本論文の第二の検討課題である、社会環境の恋愛関係流動性と個人の配偶価値との交互作用効果が、恋愛関係におけるシグナリング行動やパートナー保持行動に与える影響を検討した。研究の結果、シグナリング行動である自己価値誇示に有意な日米差は得られず、さらにコミットメント・シグナリングが北米よりも日本でより行われるという、本論文の予測に反する結果が得られた。しかし、パートナー保持行動については予想通りの社会差が得られ、恋愛関係流動性が低い日本よりも恋愛関係流動性が高い北米でよりパートナー保持が行われるとの結果が得られた。加えて、恋愛関係流動性と個人の配偶価値の有意な交互作用効果が得られ、魅力的な個人ほどパートナーからより頻繁にパートナー保持行動を受けるが、こうした個人の配偶価値の効果は恋愛関係流動性が高い社会環境においてより強いという予測通りの結果が得られた。

以上を踏まえて第 4 部では総合考察を述べた。これまで、ヒトの恋愛行動や恋愛心理に関して社会差を検討した研究はあまりなされてこなかった。また社会差を扱った研究も多くはその差異のパタンの記述に留まり、その原因を解釈した試みは少なかった。ヒトを取り巻く社会環境の多様性を、異なる淘汰圧を生み出す適応環境として捉え、それぞれの社会環境における適応的な恋愛行動や恋愛心理が異なるとする本論文の試みは、ヒトの恋愛関係における行動や心理に関するより一般的な理論構築に寄与するだろう。